

平和を望むなら平和に備えよ

—日本国憲法の理念を利器に

金子 勝
中野貞彦

人類の歴史を振り返れば、約700万年前に最古の人類が現れ、現世人類の直接の祖先である「新人」が現れたのは約16万年前といわれる。最後の氷期が約1万1700年前に終わり、地質学的区分で「完新世」の比較的温暖な気候の下で、人類は狩猟・採集から農耕・牧畜を営むようになり、紀元前3000年前後には高度な文明をもつ都市が形成され、国家が形成されていく。

現在、人類には、産業革命以降の人類の活動が作り出した「気候危機」が迫り、また人類の活動が地質に顕著な痕跡を残していることが明らかになって、「完新世」から「人新世」への区分が議論される状況にある。

戦争は、「武力による国家間の闘争」（『広辞苑』）であり、人類の歴史からみれば、戦争のない時期が圧倒的に長いのである。このことは、人類が戦争を克服し平和な歴史を歩む可能性があることを示唆する。また、人間だけがもつ「理性」によって文明を発展させ、その「理性」によって、人類の存続に係わる現実的・危機的な問題が突きつけられていることも認識している。このような人類史上における21世紀の位置を背景に、本特集を読み考え議論し、活かしていただきたい。

現実の世界に目を向ければ、2022年2月24日、ロシア連邦のプーチン政権が起こした「ウクライナ侵略戦争」は、人類を滅亡させる「核戦争」の危機を含む深刻な戦争であり、世界中の人々に大きな衝撃を与え、地球上から戦争を廃絶する方法を考える課題を与えている。日本国では、「ウクライナ侵略戦争」を契機として、日本国憲法の『平和主義』を否定する武力攻撃による自国防衛論が、改憲派からも護憲派からも主張される事態が出現するに至った。岸田文雄内閣は、2022年12月16日に、日本国が他国を武力攻撃できるようにする「安全保障3文書」を閣議決定し、大軍拡

を推進している。

地球上から戦争を廃絶するという崇高な理想が実現できるよう、日本国憲法の平和理念を拠所として、世界各国と日本の戦争を封じ込める平和の取り組みを追究したい。

三宅論文は「安保3文書」の背景を明らかにし、「敵基地攻撃能力」の持つ軍事的ロジックを突き詰めて虚妄性を明らかにし、「抑止力」によらない建設的対応を提示する。奥野論文は「安保3文書」は専守防衛からの大転換であり、「平和国家」でなくなっていいのか、その意味を広く知らせていくことの重要性を強調する。植野論文は、日本国憲法の平和主義は単なる平和を願うものでなく、第二次世界大戦で行った行為を反省して二度と戦争をしないという決意であり、自民党改憲案は自衛隊を実戦参加につなげるものと批判する。中野論文は、軍備全廃を不動の信念とする幣原喜重郎が憲法制定に果たした役割を新資料によって明らかにする。金子論文は、20世紀の平和理論は「侵略戦争を違法とする国際法」を出現させたが、21世紀には「自衛戦争を違法とする国際法」制定がもつ必然性・可能性を、9条の先駆性を踏まえて追究する。

二橋の「コラム」と青龍・岸の「談話室」は対話と公演の興味深い実践を、野澤は9条が核兵器廃絶運動を力づける相互の関係を述べる。木戸は、暴力で守られる「正義」と完全な非暴力による「平和」の相克について深く考察する。河内の「ひろば」はASEANからの学びについて、藤井は石垣島住民のミサイル基地反対の運動を、本田は「台湾有事」への的確な批判を示し、河は韓国から見た9条の意味を解き明かし、田島は憲法ゼミナール実践から得た意義を強調する。

（かねこ・まさる：客員編集委員，憲法学）
（なかの・さだひこ：客員編集委員，憲法制定史）